

## 高村美也子『プランテーションの人類学——タンザニア・ボン デイ社会とココヤシ栽培』

■ 出版地：東京 ■ 出版社：風響社 ■ 出版年：2023年 ■ 総頁数：266頁 ■ 定価：5,000円＋税

石原 美奈子\*

本書は、タンザニアのボンデイと呼ばれる民族集団が暮らす村を中心に、著者が2004年以来11回にわたり断続的に実施してきた現地調査をもとに書かれた、ココヤシ栽培・利用・消費に関する民族誌である。東南アジア原産のココヤシは、「数千年前に東アフリカに伝播し」(p. 162)、インド洋交易の担い手であった「アラブ・ペルシャ系商人」(p. 16)が東アフリカ沿岸部各地に定着しプランテーションを開設することによってその栽培が広がった。そしてココヤシはタンザニアにおいて独自の仕方ですべて社会・文化的に意味づけされながら、日常生活の様々な場面で用いられるようになったことがミクロ・マクロな視点から描かれている。エチオピアのコーヒー栽培地域で調査を実施してきた評者にとって、栽培作物に対する包括的なアプローチを提示する本書は、大いに参考になるものであった。

本書は以下のように3部構成となっている。

まえがき

序論

第1部 ボンデイとココヤシ

第1章 ボンデイ社会

第2章 アラビア人によるココヤシ栽培導入

第2部 ボンデイのココヤシ利用

第3章 ボンデイ族のココヤシ栽培

第4章 ココヤシの葉利用

第5章 ココヤシの実利用

第6章 ココヤシの樹液利用

第3部 グローバルヤシ科植物

第7章 ヤシ科植物の生態

結論：ココヤシが栽培地域にもたらす役割

おわりに：タンザニア・ボンデイ社会とココヤシ栽培

まず序論で、本書の目的と調査期間および調査方法、本書の構成が記されている。

第1部「第1章 ボンデイ社会」では、タンザニア連合共和国を構成する120の民族のなかでのボンデイの位置づけ、および調査地（タンガ州ムヘザ県ムクジ村）の民族構成が示されている。ただボンデイをボンデイたらしめていたはずのボンデイ語の日常的使用は、とくに若者の間では公用語スワヒリ語に取って代わるようになっていくことが著者の調査から明らかにされている。続いて、ボンデイの居住地の自然環境、さらにムクジ村の生活環境（交通事情・人口/世帯構成・公共施設）を示した上で、ボンデイの生活実態を明らかにしている。調査地ムクジ村は130年ほど前に設立された村である。そこで生存するボンデイ最長老の世代を擁するCh家の家族構成を例として結婚と居住空間について記した後、ボンデイの生業である農業と現金獲得のための活動について概説している。続いて宗教については、「土着宗教」と外来宗教（イスラーム・キリスト教）が混在していることを示している。さらに冠婚葬祭において、「土着宗教」と外来宗教がどのように使い分けられているのかについても詳述している。

「第2章 アラビア人によるココヤシ栽培導入」では、まず東アフリカ沿岸部のココヤシ栽培がインド洋貿易との関係で導入され、奴隷労働を用いたプランテーションが、19世紀にアラブ人らによって、20世紀には植民地支配下でドイツ人によって開設されたこ

\* 南山大学

とが先行研究に基づき示されている。続いて著者は、タンガ州パンガーニ県におけるココヤシ栽培の現状について述べ、オマーンからのアラブ人移民3世のLS氏のココヤシ農園で収穫されたココナッツがタンザニア全土に出荷されていることを示している。そして最後にタンザニアにおいてどのような種類のココヤシがどこでどのくらい栽培されているのかについて述べた上で、タンガ州のなかでムヘザ県が最も生産量が多いとしている。

第2部「ボンデイのココヤシ利用」では、ボンデイがココヤシの様々な部位を様々な用途に利用していることが網羅的に紹介されている。まず「第3章 ボンデイ族のココヤシ栽培」では、ココヤシの栽培方法、ココヤシ栽培における所有、自家消費用/商用の栽培方法の区別、用途(実収穫用/樹液採取用)による区別、相続や管理の方法、採取作業を行う被雇用労働者について記述されている。

「第4章 ココヤシの葉の利用」では、ココヤシの葉の特徴を踏まえた上で、葉が籠・扉・塀・屋根・燃料・ほうきなど様々な用途に用いられていることが写真と共に示されている。さらにこれらの製作を担う人々の属性(性別と世代、熟練度など)について整理し、それらが商品として販売される場合の価格についても記し、ココヤシの葉がいわゆる社会的弱者(女性・高齢者・身障者)の現金収入源となっていることを示している。

「第5章 ココヤシの実利用」では、ココヤシの実の特徴(種子(内果皮・胚乳液・胚乳からなる)と外側のファイ(外果皮・中果皮)から構成される)を踏まえた上で、実が収穫・販売される仕方が示されている。さらに、果皮とその他の部位がどのように利用されているのか、スワヒリ地域における代表的なココナッツ料理にどのようなものがあるのかについて、写真と共に示されている。最後に、著者はココヤシの実を利用した労働がどのような属性(性別と世代、熟練度)の人々によって担われているのかについて紹介している。

「第6章 ココヤシの樹液利用」において、ココヤシの樹液がどのように採取され、どのように酒場に卸され消費者の手に届くのかについて詳述している。

第3部「グローバルヤシ科植物」は「第7章 ヤシ科植物の生態」からなり、1部1章構成となっている。ここでは、ヤシ科植物が多種多様な亜科をもち、アジア、アフリカを中心に世界的に栽培が広がっているこ

とが示されている。なかでも三大栽培ヤシ科植物に位置づけられるココヤシ、アブラヤシ、ナツメヤシの生産地について地図とグラフを用いて示し、さらに、それらをはじめサゴヤシ、ラフィヤヤシがどのように利用されているのかを短くまとめている。また宗教・儀礼的目的のためにもヤシ科植物が利用されていることが事例と共に示されている。そして最後にココヤシの植物学的特徴を整理した上で、生育地域が南アジアからアフリカの熱帯・亜熱帯地域に広がっており、アジアでのココヤシの利用については研究の蓄積があることが示されている。

そして結論「ココヤシが栽培地域にもたらす役割」として、まず本書の内容を振り返りつつ整理した後に、原産地の東南・南アジアと東アフリカにおけるココヤシ文化の類似と差異について考察し、とくに信仰における使用の差異が顕著であることを明らかにしている。

もうひとつ本書の独自な点として、末尾にボンデイ語・スワヒリ語の語彙とことわざをまとめた「資料編」を添付していることがあげられる。

本書は東アフリカの「スワヒリ地域」(p.1)における「ココヤシ文化」を現地調査に基づき包括的に扱った先駆的研究として位置づけることができる。ここで、著者がボンデイの居住する村を「スワヒリ農村」と表現している点に注目したい。著者は、ボンデイが(消滅の危機にある)独自の言語(ボンデイ語)を有する民族であるものの、スワヒリ語をも話し、スワヒリ文化の影響を受けている点から(p.31)、ボンデイの住む村を「スワヒリ農村」(p.19)と捉えている。ボンデイ社会においてスワヒリ語の使用頻度が若者中心に高まっており、ボンデイ語を使用する場面や世代が少なくなっていることは著者の調査から明らかになっており、それは統計から明示的に読み取ることができる。だが、スワヒリ語はタンザニアの公用語であり学校教育において教授語になっているので、スワヒリ語の利用頻度の高まりのみを根拠にボンデイ農村を「スワヒリ農村」と捉えることは難しい。それでは「スワヒリ文化」(p.31)についてはどうであろうか。一般的に「スワヒリ文化」は、アラブ・ペルシア文化とバンツール文化が融合してできたものであると理解されており、そのひとつの要素として「イスラーム」がある(富永2008)。だが、ボンデイ社会の場合、ムスリムは50%に過ぎず、キリスト教徒が50%を占めている(p.63)。ボンデイ農村を「スワヒリ農村」と捉えるのであれば、

それなりの根拠が必要であるように思える。

また、本書のタイトルが『プランテーションの人類学』とされていることにも疑問を禁じ得ない。「プランテーション」とは一般に単一作物の栽培に特化した大規模農園をさす。大規模農園の開設・経営には、国家・地域規模での政治経済的利権のやり取りや、資本家・加工業者・労働者／奴隷の関係といった役割の違いに基づく経済構造が不可分の要素としてあるように思われるが、本書においてこうした政治経済的側面はほとんど取り上げられていない。東アフリカ沿岸部におけるココヤシのプランテーションは、19世紀に「アラブ・ペルシア人」によって始められたものの、現在は「アラブ・ペルシア人」以外の人々（ボンデイ含む）によっても経営されている。「アラブ・ペルシア人」によるココヤシ栽培の独占状態が何をきっかけにして、どのように崩れ、どのように移行が行われ、現在はどのような規模の所有形態がどこに広がっているのだろうか。そうした側面や経緯はまさにココヤシ栽培の歴史の根幹にあたるはずである。第2章ではパンガーニ県のプランテーションの事例が取り上げられており、パンガーニ市にはココナッツ加工工場の廃墟があることが写真とともに明示されている。だが、パンガーニ市に残された加工工場がなぜ廃業となったのかについては「アラブ・ペルシア人商人が帰国した」(p. 72) からという理由しかあげられておらず、なぜ帰国を強いられたのか、彼らに取って代わりココナッツ加工を行うようになった人々はいないのか、などの説明がない。この点をもっと詳細に記述できていたら、プランテーションをめぐる矛盾や問題点などについてより厚い記述ができたであろう。現在のプランテーションについては、パンガーニ県のマウヤにプランテーションを保有するLS氏の家族構成やココヤシ栽培・販路について紹介されているだけで、その記述か

らは「プランテーション」であることの特徴が書かれていない。著者の記述が最も厚い部分は第2部「ボンデイのココヤシ利用」となっているので、タイトルと内容にズレが生じているのである。

本書は、東アフリカ沿岸部において、外来の栽培作物であるにもかかわらずココヤシが農村部に深く根づき、その部位が生活の様々な場面で、様々な目的のために用いられている実態を詳細に書き表した書物として評価できる内容となっている。だからこそ、表記上の誤りや誤字脱字が数多く散見されること、インタビューに関する記述が不統一であること、参考文献リストの校正が不十分であることなどは残念でならない。

また、本書の末尾にボンデイ語の語彙やことわざ(と日本語訳)が資料として提示されていることは、ボンデイ研究に日本人の若手研究者をひきつける上で有用であることは間違いないが、本書の主要なテーマとはあまり関係がないように思える。本書がボンデイ社会の民族誌であることを謳うのであれば、この資料は一定の意味があるかもしれないが、『プランテーションの人類学』を題名としている本書において、文中にも使われていない現地語のリストをわざわざ資料として提示する必然性はないように思えるのである。

以上のように、ブラッシュアップする余地はたくさんあると思われるが、本書によって東アフリカ沿岸部におけるココヤシの人類学的研究が一步大きく前進したことは確かであり、今後著者が本書を踏み台としてさらに研究を深化・進化させてくれることを期待してやまない。

## 参考文献

富永 智津子

2008 『スワヒリ都市の盛衰』(世界史リブレット103)  
山川出版社。